

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	徐 暢
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
中国語を母語とする上級日本語学習者の聴解メカニズム －作動記憶の機能の観点から－			
論文審査担当者			
主 査	教 授	松 見	法 男
審査委員	教 授	中 條	和 光
審査委員	教 授	深 澤	清 治
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国語を母語とする上級の日本語学習者を対象とし、認知心理学の観点から、文章聴解の過程を実験的に検討したものである。具体的には、Anderson（1985）による聴解の3段階モデル（以下、Andersonモデル）に沿って、日本語学習者の聴解時の処理と記憶の様相を、作動記憶（working memory：以下、WM）の機能の観点から検討することを目的とした。実験では、日本語学習者用に開発されたリスニングスパンテスト（listening span test）の得点を、学習者の言語処理の効率性を表すWM容量の指標として扱い、併せて構音抑制課題を、WM内の音韻ループにおける構音リハーサルを妨害する並行課題として採用した。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、第二言語の聴解に関する先行研究を概観し、本研究の主な説明理論となるAndersonモデルと、Baddeley（2000）のWMモデルについて説明した。そして、日本語学習者の聴解研究における未解明な点を指摘し、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、研究課題に沿って4つの実験を行い、日本語学習者の文章聴解の過程を調べた。実験1では、日本語学習者の一般的な文章聴解における構音抑制の影響について検討した。その結果、構音抑制課題を用いて母語の聴覚的処理を解明した先行研究の結果とは異なり、構音抑制が日本語の聴解過程に影響を与えることが示唆された。音韻ループ内での構音リハーサルが妨害されることにより、第二言語としての日本語の処理効率を維持するため、WM内で処理資源の再配分が行われることがわかった。</p> <p>実験2、実験3、実験4では、構音抑制課題の有無と材料文の文脈性を操作し、WM容量が異なる学習者の聴解時の処理の様相を、Andersonモデルに基づいて解明した。実験2では、単文の連続呈示事象を用いて、知覚段階と解析段階における、言語処理効率が異なる学習者の処理様相について検討した。その結果、WM容量の小さい学習者は音韻情報の記憶に依存し、聴解の処理を進行させることがわかった。他方、WM容量の大きい学習者は処理資源の配分をより適切に行うことができ、音声の呈示後、迅速に意味処理を行い、新たな命題表象を作り、それを保持する可能性が示唆された。</p> <p>実験3では文章における文脈の順序性を操作し、また実験4では文章における文脈の連</p>			

続性を操作し、それぞれ聴解の第2段階である解析と第3段階である利用における情報の処理と記憶の様相について検討した。実験3と実験4の結果から、WM容量の小さい学習者は、解析段階での命題表象の形成度が低く、WMの構成要素である音韻ループに、より多くの処理資源を充当することが推察された。他方、WM容量の大きい学習者は、解析段階における命題表象の形成度が高く、WM内のエピソードバッファにより多くの処理資源を配分し、命題情報を長期記憶に転送することによって、多くの言語情報を貯蔵できることが推測された。ただし、WM容量の大きい学習者もWM容量の小さい学習者も、聴解過程の利用段階における言語処理が難しいことも示唆された。

第3章では、実験1から実験4までの結果のまとめを行い、第二言語としての日本語の聴解における構音抑制の影響、ならびにAndersonモデルの各段階における日本語学習者の処理資源の配分と注意の向け方について、WM容量の小さい学習者と大きい学習者のそれぞれの特徴を総合的に記述し、考察した。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆、及び今後の課題を述べた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. これまで未解明であった第二言語学習者の文章聴解におけるWMの機能について、複数の実験を体系的に行い、その詳細を検討した点である。第二言語の聴解メカニズムについてWMの機能の観点を取り入れた実証的研究は、管見の限り見当たらない。本研究の結果から、文章聴解におけるWMモデルの言語処理に関する各構成要素の機能が明らかとなり、それらの働き方が聴解過程の各段階で異なることが推察された。
2. 聴解過程が3段階から構成されるというAndersonモデルに沿って、日本語学習者の文章聴解における言語処理モデルを提案したことである。各段階での処理の様相は、聴解遂行中の注意の向け方を示している。日本語の文章聴解における学習者の認知過程を解明することは、教室での聴解指導に有効な方法を、理論的根拠とともに提案することに繋がる。
3. 学習者が有するWM容量の大小による聴解過程の相違を明らかにした点である。従来、日本語教育の分野では、WM容量の大小によって聴解成績が異なることは知られていた。しかし、WM容量の大きい学習者と小さい学習者の間で、根本的にどのような違いがあるかについては実験的に解明されていなかった。それゆえ、日本語教育の現場に研究成果を応用することの難しさも指摘されていた。本研究は、WM容量の大きい学習者と小さい学習者の、聴解の3段階における言語処理の容易な点と困難な点を具体的に導出した。第二言語としての日本語の研究と教育の両面に新たな視点を提供したと言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月7日